

油彩

(テンペラ併用)

牡丹を描く

三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京堂芸大卒業 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画 新世代展、両洋の眼現
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品、文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在 '96
 『97』 春陽会会員

以前シルバーポイントでの制作を簡単に紹介しましたが、今回はこれを使いながら、新しい表現を試みます。

■支持体・プレパレーション

支持体は紙でも可能であることは先に書きましたが、今回は、他の素材も併用することを考え、7月号で紹介したMDFという合板を使います。大きさはF4号にします。

プレパレーションは、アクリル樹脂を使用したカオリン地にします。この下地塗料は、これまでの膠下地塗料とまったく同じ作り方で、膠をアクリル樹脂に置き換えたものです。アクリル系絵具は発明されてからまだ百年と経っていませんから、油彩画の六百年とは比べる由もありません。しかし、屋外壁画での耐光や、酸・アルカリなどの耐化学性など、すべて良

好な数字を得ていることから、予測としての耐久性はかなり安定したものが考えられています。

作り方は、アクリリックメディウム(※注1)を水で倍に薄めたものに、カオリンをひたひたになるまで振り入れます。これを、MDFの表面に縦横方向に交互に6度塗りします。

仕上げはヤスリがけをしません。これは、シルバー・ポイントに必要な、適度のザラつきを得るためです。紙ヤスリをかけた上から、最後の塗りを施します。

使用する板が薄い場合は、乾燥によって反る場合がありますので、裏面にも同じ塗料を塗っておきます。

■シルバー・ポイントでの描写

シルバー・ポイントも、先に示したのを使います。銀線を芯ホルダーに装着したものです。

銀は空気中の硫黄分との反応で黒くなりますので、描いた直後としばらくした後では、その色が微妙に異なります。そのため、数日を要する制作では、その変化を計算に入れなければいけません。

また、鉛筆と違い、消しゴムで消して描き直すことも出来ませんので、かなり制限された表現になります。それでもこのシルバー・ポイントを使う理由は、その微妙な色の表現が、鉛筆などでは得られないからです。

今回のモチーフの花も、薄い花びらの表現には、この繊細さが必要でした。描き始めは、ごく軽く見当をつけることから始めます。微かに見えるかどうかぐらいの線で、大体の輪郭をつかみます。決定した部分から、次第に筆圧を加えて、明確な線にしていきます。さらに陰影を描きこみます。

つとも暗い部分には、縦横、斜めなど、多くの方向の線を入れます。

■背景部

ある程度の表現が出来た段階で、背景を入れます。今回は絶対空間の黒に入れます。シルバー・ポイントでの「黒さ」には限界がありますので、黒鉛を使用します。

黒鉛は、鉛筆の原料です。この黒鉛と粘土を捏ねたものを焼き固めたものが、鉛筆の芯になります。その粘土の含有量によって、6B〜6Hなどの硬さが決定します。この黒鉛をペトリロールで溶いて、筆で背景部分に塗布します。

さらに、花や葉の部分を描きこみます。黒さの足りないところは、墨を併用し、全体のバールを合わせます。15、16世紀頃の作品にも、暗部の強調として墨やインクが使われています。

■砂子を撒く

最後に、背景に銀箔の砂子を撒きます。この技法は日本画ではよく使われるのですが、これを洋画の技法に併用させることで、新たな表現の可能性を図ってみました。

準備としては、日本画材店で専用の振り筒が手に入りますので、それに箔を入れ、穂先の固い筆で掻き回して砂子を作っておきます。これをもう一度振り筒に入れて、画面の上からトントンと軽く叩いて砂子を降らすことになりま。画面の準備は、砂子を撒きたい部分に接着剤を塗っておかなければなりません。日本画では膠を引くことになりませんが、洋画の技法では箔下ワニスというものを使います。今回の黒鉛は親水性に欠けますので、膠は不適當で、油性のもの

にしなければなりません。また、黒鉛には展色材が含まれていませんから、一度定着させる必要があります。そこで、フキサチーフと箔下ニスとの両方の用途の為に次のものを準備しました。

リンシード・オイル1容量、ダンマル溶液1容量、アルキド樹脂2容量(※注2)、テレピン4容量。リンシードは樹脂分だけでは後で溶解してしまうので不溶解にするため、ダンマルは接着時の粘性(ベタベタした状態)を得るため、アルキドは乾きとマチエールのためのものです。

これを黒鉛の部分に塗布し、しばらく置いてから(テレピンがほぼ揮発してから)、砂子を撒きま

さらに、トレーシング・ペーパーなどの薄い紙を上から当てて、砂子を圧着します。

乾いてから、先の油性ワニスを花の部分にも塗布します。これは、マチエールの統一を図ると共に、シルバー・ポイントの定着のためでもあります。また、砂子にアルキド絵具の黒を薄くかけ、輝きを鈍くすると同時に、銀箔の硫化を防ぎます。

今回の制作は、忘却の彼方にある古典技法と最新の材料、さらに西洋と東洋という、両極にあるものを一つの画面で表してみました。新しい材料は、前述のように耐久性は未知のものです。優れたものを積極的に取り入れていくことも絵画の進歩につながります。その性質を充分に知った上で、素材を生かした使い方をしていけば、新しい表現の発見があるのではないのでしょうか。

(注1) アクリリック・メディウム
各メーカーから多種のメディウムが市販されているが、ここではほとんどシンプルなものを使う。メーカーによって名称が異なるがグロス・ポリマー・メディウムというものを使用。

(注2) アルキド樹脂：不乾性油(大豆油など)を変性、樹脂化したもの。画用としては、ストロング・メディウム、リクイン(又は、オレオパスト、ウインジェル)などという形で市販され、油絵具に混ぜて乾きを早める用途に用いられる。
また、これを使った絵具がウインザー・ニュートン社から出ている。



制作過程3
陰影の調子を線の集積で表現していく。



制作過程1
シルバー・ポイントで、ごく軽く見当をつける。



制作過程4
背景に黒鉛を塗る。



制作過程2
次第に筆圧を加えて、明確な形を捉えていく。



制作過程 7
花芯の細部描写を行い、全体の黒さの調子を合わせる。



制作過程 5
背景全体に塗布した状態。



制作過程 8
ワニスを塗ってから、銀の砂子を撒く。さらに、この上からアルキド黒をかけ、銀の輝きを鈍くさせる。



制作過程 6
葉の濃さの足りない部分を加筆。さらに濃い部分は墨を併用。



完成作品

「牡丹図」 F4 合板にカオリン地、シルバー・ポイント、墨、黒鉛、銀箔。